

はじめに

PCBs・ダイオキシン類や有機フッ素化合物、有機塩素系農薬などは、環境での蓄積性や残留性が強いことから、いわゆる POPs (Persistent Organic Chemicals) として、世界的に生産や使用が制限されていますが、半減期が長いため、私たちの体内から容易にはなりません。さらに最近使用が増えてきているプラスチック可塑剤などとして使われているフタル酸エステル類やビスフェノール A などは、半減期は短いのですが広範囲に使用されているため、多くの人々の血液から検出されます。このような化学物質の人への影響は、大人よりも小児、あるいは胎児期に大きいことが懸念されています。たとえば尿道下裂・停留精巣をはじめとする先天異常は、各国で増加が示唆されていますが、その原因が器官形成期のアンドロゲンの作用に依存しますので、いわゆる環境ホルモン作用を示すといわれる PCBs・ダイオキシン類などとの関係を調べる必要があります。しかし、世界的にも環境化学物質の次世代への直接的な影響と因果関係は、未だ解明されるには至っておりません。さらに、ADHD など小児の軽度発達障害、あるいはアレルギーは、最近各国で増加しているとの報告が発表されていますが、わが国では地域の一定集団を対象に環境リスク要因を評価することが全くなされていませんでした。

そこで、私たちは 2002 年から 2 つの前向き研究を立ち上げて研究を行っております。本報告書は、直近 3 年間分の研究成果報告になります。札幌市の 1 産院で説明し同意を得た妊婦様 514 人の母体血とお子様の臍帯血について、PCBs・ダイオキシン類、水酸化 PCB 類、有機フッ素化合物 (PFOS・PFOA)、農薬およびビスフェノール A の測定を行い、種々のアウトカムとの関係を調べています。また、北海道全域の北海道 (大規模) コーホートでは、母子ペアで参加者が 2 万組を超えました。妊娠初期に同意を得た妊婦様全員の葉酸、コチニン濃度を測定し、母体血の有機フッ素化合物もより詳しく PFDA・PFNA・PFHxS・PFUnDA など 11 種類の測定を行い、出生時体重やアレルギーへの影響を研究しています。今後は、先天異常や疾病との関係について解析を進めます。いずれのコーホートも、次世代影響を評価するために思春期まで追跡させていただくよう、参加者の皆様をお願いしています。

一方、最近のゲノムおよびエピゲノム研究の進歩から、化学物質の影響の強さは、曝露された個体の異物 (薬物) 代謝酵素類の遺伝子多型や疾病感受性遺伝子、あるいはメチル化等によっても修飾されることが考えられます。このような研究は、同じ曝露濃度でも遺伝的ハイリスク群である場合、より予防的な対応を進める必要があること、また環境の影響が遺伝子を介さず次世代に及ぶという意味で重要と思われれます。

本研究は、産婦人科医療機関など臨床家と環境疫学専門家の協力で進めております。このような地域をベースに胎児期から立ち上げ、環境リスク評価を行っている研究は、最近少しずつ増えていますが、本研究は、世界的にもその先駆けと申し上げます。今後、数多くの成果が出ることを期待されますので、引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

最後に多くの皆様のご尽力により研究を継続することができ、過去 3 年間の報告書をこのようにまとめることができましたことに対して、衷心より御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

研究代表者 岸 玲子